龍田

次第

教へ数ある道も秋津國〳〵数ある法を納めん

ワキ詞 是は六十余州に御經を納め申聖にて候我此程は南都に候ひて霊佛霊社残りなく拝み廻りて候又是より龍田越に河内國へと急ぎ候

乃ゞ具いましめもゆるめをみしまや
紅葉乃錦おりて氷みもえ中絶ん
を乃謂きめや成ぬらん　女何　名残ある
帝ハ帝の御製ニま皮家隆の手
み龍田川紅葉をとろう氷やふる
いかれもけや絶まんと筆て於模よ
讀人けきハかきるく紅葉ニ限るへくら

上音に
氷みもけわるゝは乃龍田川アツし
錦繡掛非天月乃数をりよある近
も紅葉をとろうす氷を情あや中
絶てやむん人いとろあやさあきた
みあやうさい薄氷を踏理り乃筆
とふもい渡りさかれたまし
甲何
掛けきいめ中なる人かくわかりそ

シテ「是ハ観みてんが明神へはしまりのりそは
道者なるへくやはへし　ワキ「うれしや
御供申宮めくり申さばやと存候
女「是こそ龍田の明神なれば入給へ
よくよく拝み給へ　ワキ「かきやあ
比ハ霜なり月あれバ木葉の情雲
冬枯れてきしきもひしき社頭の
みかきに盛なるをみる一もとあり
さり是ハ神木にて候　女「さん候
当国三輪の明神の神木ハ杉なり
当社ハ紅葉をこめて給かよより紅葉
を神木とあかめ申せは　ワキ「あり
がたや我国にとめくまでとも日ハまる
此は神木をまつる事の有難けれよ

此秋津洲に地をしめ、御代を
まもり御身を守護しまします
れども其の葉即身乃ちなき
みへし飾乃孫僧の法味にひかれて
夜半に神燈をかかげ給ふ
クリ地 たきまつりし御神とは則當社
乃ほるあり　シテ むかし天祖乃凡

ことはりぞまことあきらかにかみもみそなはしたまふや
サシ さるほどに當国宝山にまもりめつ
たちまち御代のため民安全に
豊年するも偏に當社の御故なり
トシテ てもなほ秋の四方乃いろ千秋の
凡かきを目前よりかしこしとよ
きみも是なる龍田川ぞおとや秋の

敵とみかたの鳥のみうきはをぬさも
ひきつるちどり夜ごと浦上無行しく
さいもいと山河草木国土はさまう
てずあつらきをなみひきまた

敦盛

ワキ 夢の世なれはおとろきてすつるや現なるらん
是ハ武蔵国の住人
熊谷の次郎直実出家し蓮生法師にて候
扨も敦盛を手にかけ申し
事のあまりに御いたはしく候ほとに
かやうの姿と成りて候是より一の

なと社見えて候へ其上樵歌牧笛とて
草刈の笛木こりの歌ハ歌人の詠にも
作りおかれたる笛竹の不
審ハなさせ給ひそとよ　ワキ 実に〳〵是ハ理り
さて〳〵樵歌牧笛とハ　シテ 草刈の笛
ワキ 木こりの歌の　シテ うき世をわたる一ふしを
ワキ うたふも　シテ まふも　ワキ 吹も　シテ 遊ふも

地 身のわさの好る心に寄竹の小
枝蝉折さま〴〵に笛の名ハ多けれとも
草刈の吹笛ならハこれも名ハ青葉の
笛と思召せ住吉の汀ならハ高麗笛や
らん是ハすまの塩木の海士の焼
残と思召せ〳〵　ワキ 不思議やな余の草
刈ハ皆〳〵帰り給ふに御身一人とゝま

仏申し敦盛の菩提を猶も弔ハんと
あはぢかたかよふ千鳥の声きけハ寝
覚も須磨の関守ハたそいかに蓮生敦
盛社参りて候へ　不思議やな鳧鐘て
ならし法事をなしてまどろむ隙も
なき所に敦盛の来り給ふぞやさてハ夢
にてあるらん　何しに夢にてあるへきぞ

現の因果を晴さん為に是迄現れまかり
たり　うたてやな一念弥陀仏即滅
無量の罪障を晴さん称名の法水を
絶さぬ弔の功力に何の因果ハありそ海の
深き罪をもらひうかめ　身ハ成仏の得
脱の縁是又他生の功力なれハ　日比
ハ敵今ハ又誠に法の友成けり

永乃秋の葉の四方の嵐にさそはれ
散々になる一葉の舟にうき沈みて
夢にたにも帰らぬ籠鳥の雲をこひ
帰雁行をみだるなる空さだめなき
旅衣日も重りて年月の立帰る春の
比此一谷に籠りてしばしは爰に須广の
浦うしろの山風吹落て野もさえ
かへる海際に舟のよるとなく昼となき
千鳥の声も我袖も波にしほるゝ磯枕
海士の苫屋にともねして須广人にのみ
そなれ松の立るや夕烟柴といふもの
折敷て思ひを須广の山里のかゝる所に住居
して須广人に成はつる一門の果ぞかな
しき　扨も如月六日の夜にも成しかば親

我ら経盛を始として集め今様をうたひ
舞遊びしに　扨は其夜の御遊びなりけり
城の内にさも面白き笛の音の
寄手の陣まできこえしは　夫社げにも
敦盛が最後迄持し笛竹の
音も一節を謡ひ遊ぶ　今様朗詠　声々に
拍子を揃へ声をあぐ　去程に御舟を

始め一門皆舟に浮めば乗遅れじと
汀に打寄れば御座舟も兵船も遥に
延び給ふ　せんかた浪に駒をひかへ
あきれ果たる有様也　かゝりける処に
うしろより熊谷の次郎直実のがさじと
追かけたり　敦盛も馬引かへし波
の打物抜て二打三打はうつぞと見え

去る馬の上にてひつ組て波うち際に
落重つて終に討れて失し身の因
果ハめぐりあひたり敵ハ是ぞと討んとするを
あたをバ恩にて法事の念仏
して弔ハるれば終にハ共に生るべき
同じ蓮の蓮生法師敵にてハなかり
けり跡弔ひてたび給へ〳〵

夕顔

ワキ 是ハ豊後国より出たる僧にて候
我も松浦箱崎の霊地にも詣
名をハやまを春秋も名高き男山に
まんと思ひ此程都に上りて候
も又立出仏閣に参らバやと思ひ候
寺々を都よりちつきの前ハまつる〳〵

たゞくれかゝる雲乃林夕日影
うつろふ方は秋草の花紫乃野を
あるく賀茂乃御社すぎ行ば
しけの森もうちすぎて行ば宮うへ柱
屋乃月やあらぬとかこちきる五条
あたりのゆかりやおもしろき前
まで尋ねとひさくる賀もきさく

あふく語は見しや五條あたりの名を有
さらぬかしきやあやあの屋妻よりせれ
寺をと吟じある声のゆかしさは皆相侍
尋ねきやとわひ作　山乃端の
心も知らで行月は上の空にて
影やたえなん玉山の雲は地まち
夕陽臺のもとに消やすく相江の雨は

さても家成男子の願ひの侭よまば
此乃衣の袖おうちよひ行とつく
まんと云し思人ハ音羽山嵐の松
風かよひ数々明わするよこをの
迷ひもあしや藤自の道より法
出るそしおきてれの雲ちまて雲
はまさうきこよ出入りきう里

隅田川

是ハ武蔵の国隅田川のわたし守
にて候今日ハ舟を急ぎ人々をわた
さはやと存候又此在所にて子細ある
て大念仏を申す事の候間僧俗を嫌
はず人数をあつめ候其由皆々心得候へ

次第男
雲も東乃旅衣日もかさなるの

めでぱあ姫と待かけるみそく山哀ぞや
人の親の心ハやミよあるねやも子を思ふ
道よ来しかとも今法ひ志る雲の
道行くよとづて行末を付と寿ぬ
語んぎくやいりよう八乃竜成風たふも
松よ音するおとひあり荒蕎ヶ原
乃露のよよ我を恨ミてや明くれん

思ひハ都小自行よ年経てもとめる世成
かゞ思ハけるあよ獨子をバ人高くよおろう
ろれて行急をさけハ相坂の関乃東の
国をさきおつまとるやよ下あぬとやよふか
心乱きつゞおうとつり思ふ子乃路を
尋てまよふあり千里を行も親子
を忘れぬとやおもと本よりも契り

かりありうき世のすまひらちとたちよ
親もさぞ覚やかしてよ親と子乃四鳥
のおもひもあれや尋ぬる心はそてやらん
武蔵の国と下総の中にある隅田
川まもつきよきりく
我もまたねよのをそ給ひへたと

女　おもふく

さていつよりいつくへ下る人ぞ

女　是は

都より人を尋て下る者にて候　都

人といひ狂人といひ面白ふくるふてみ

せ候へ狂はずハ此舟にハのせまじいぞとよ

女　うたてやな隅田川の渡し守ならバ日も

暮ぬ舟にのれとこそ承るべきにかたのごとくも

都の者を舟にのるなと承る

ハすみだ川のわたし守ともおぼえぬ

事な宣ひそよ　ワキ詞「げに〳〵都の人とて
名にし負ひたる優しさよ　女詞「なふ
其言葉こなたも耳に留まるものを
彼業平も此わたりにて名にしおはゞ
いざ言とはん都鳥我思ふ人はありや
なしやとなふ舟人あれに白き鳥
の見えたるは都にては見馴ぬ鳥也あれ

をば何と申候ぞ　ワキ「あれこそ沖の鴎候よ

女

「うたてやな浦にては千鳥ともいへ鴎とも
いへなど此隅田川にて白き鳥をば
都鳥とは答へ給はぬ　ワキカヽル「実誤り
て候名所には住めども心なくて
都鳥とは答へ申さで　女「沖の鴎と
夕波の　ワキ「昔にかへる業平も　女「あり

やおやとこひしも　まやて共
人を思ふ妻　わらハも東よとふ子の
げく忽ちとふきる同し心乃　妻を恋ひ
子をと尋ぬるも　思ふハおなし　旅路
おれも　我もよいさそとちを都
とうくハづわる子ハ東路よおわりや
おやとどくなくてたへぬハうそ

都鳥部のなるとやらひらくまし宮や
みおきおずほり川のみなきるま
ござつおくハおとうびれ名難波江
是へま隅田川乃東まで思へも限
おくぎくもきめるおふおもそ歳し
守舟そうちてをもくなびきはきなへ
わうし守ちりとそきのきそたひおへ

かゝるやさしき狂女にて候へば急ひで
舟に乗給へ　此渡りは大事のわたりにて
候かまひて静にめされ候へ　なう〳〵
あの向ひの柳の本に人の多くあつ
まりて候は何事にて候ぞ　さん候
あれは大念仏にて候　それにつきて哀
なる物語の候　此舟の向ひへ着かん程に

かたつてきかせ申さうずるにて候　扨も
去年三月十五日しかも今日に相当り
て候　人商人の都より年の程十二三
ばかりなる幼き者を買とつて奥へ
下りしが　此幼き者いまだならはぬ
旅の疲れにや以の外に違例し　今は一足
も引かれずとて此河岸にひれ伏

然どもおもんはう世にハ情なき者乃ありそ
此だにかゝる者どもハ具まく路次に捨て
高人ぞ奥へ下りてハ去向ての為の乃
人ど此たさハき者乃達とみハみより
有きをよみてハ猶ぞ搔とく痛るそ久へた
前世のつみふくもやるひきんさんた
よりりよゑり既に事始とみし時

だてとハいつくめでたく成人ゑこぞ父乃名字
をも国をも尋て久へハ我ハ都ハ白河に
者ぞ男乃何事とやし人乃咄ひとつ子
みてハ父にハせとこれ母討よりひ手らを
ハひしとぞ去て高人によりてハはまてかたれに
此の都の人へ乞手取もちつつう
然て此道乃国島にとつき龍てござよ

柳を植て給はれとおしやりてやがて念
仏四五反となへ終に事きれて候
なんぼう哀なる物語にて候ぞ見申
せば船中にも都の人も御座候
さらば逆縁ながら念仏を御申候て
御弔ひ候へよしあら長物語を申候
てはやう／＼おあがり候へ　男「いかに船頭

今日は此所に逗留申て逆縁なが
ら念仏を申さうずるにて候　罕「いかに
思ひある狂女何とて舟よりおりぬぞ
急ひてあがり候へ今の優（ヤサシ）や今の物語
を聞ひて落涙しけるよな急ひて舟
よりあがり候へ　女「なう舟人今のは物語
いつの事にて候ぞ　罕「去年三月今日

頼みにてこそ知らぬ東に下りたる
に今ハ此世になき跡乃しるしばかりを
見る事よげにくも無慚や死乃縁とて
生所をさつて東の道乃辺乃
土となりて春の草のミ生茂り
たる此下にこそあるらめや、さりとてハ
人々此土を返して今一度此世の
姿を母に見せさせ給へや、残りても
かひあるべきハ空しくて、あるハ
かひなき帚木の見えつ隠れつ面影
乃さだめなき世のならひ人間うれ
ひの花さかり無常乃嵐音そひ
生死長夜の月乃影不定乃雲
おほへり実目の前のうき世かな

心ハ西へと一節よ　南無や西方極楽
世界三十六萬億同号同名阿弥陀
佛　南無阿弥陀仏南無阿弥陀佛
なむあみだ仏南無阿弥陀仏　隅田
河原の波も聲たてゝなむあみ
だ仏南無阿弥陀仏南無阿弥陀
佛　声あはし打ちて鳥も音を

すゑそなむあみだ仏南無阿弥
陀佛南無阿弥陀仏　あはれ今
の念仏のうちにまぼろしく我子の
聲のきこへし此塚の中かと有を
みれハ　我らもさ様に聞しは
所詮此方の念仏をハ留めへし母
で一人申へ　と一声狂きの母

はしれ南無あみだ仏「南無阿弥陀仏あみだ阿弥陀仏と声のうちよりまほろしにみえければ「あれは我子か「母にてましますかと互に手に手をとりかはせば又きえきえと成行ばいよいよ思ひはます鏡面影もまほろしも見えつかくれつする

しのゝめの空もほのぼのと明ゆけば跡絶て我子と見えしは塚の上の草ばうばうとして只しるし計の浅茅が原と成こそあはれなりけれ

善知鳥

ワキ詞

是ハ諸国一見の僧にて候我いまた
陸奥そとの浜を見す候程に此度
思ひ立そとの濱一見と心さし候
又よき次てなれハ立山禅定
申さはやと存候急候程に是ハはや
立山に着て候心静に一見をせはやと

思ふは和もまれ洪立山に来てみれハ
まのあたり成ちこくれかた横ぎても
恐きあん人の心ぞ罪科より形すう
ろしや山路よりつちまされ数多く
ハ悪趣の険路そて涙もはらはらとめ
えぬ懸懼心附るそて山下よ社へ下里
きれく　すつくあまき成けれ僧よ申へ

きゝ乃ハ何事よてハう　陸奥へ
行くうう仏く言傳申ハへしぞと乃
濱よて古猟師よてハ者のきよされ秋
身まかりさハ其妻や子の宿をは尋
仏ふて此なハ蓑笠手向てくれよと
行へ　是ハ思ひ其よらぬ事と承ねお
八使をゆへき事ハ安き程のはしまく

てなよ似ざり舊遊雲落してあつき
泉よきひやさてもとせいをいとなまば
ゆきし士農工商の家にも生れずは又は
琴棋書画をたしなむ身ともならずして
唯明ても暮ても殺生をいとなみ
遅々たる春の日も所作たらねば時を
うしなひ秋の夜長し夜長けれど

いさり火白うして眠る事なし
九夏の天も暑をわすれ玄冬の朝も
寒からず鹿を逐猟師は山
を見ずといふ事あり身のくるしさもかな
しさも忘草の追鳥高縄をさし
ひくしほの末の松山風あれて袖に浪
こす沖の石又はひかたとて海越しなりし

思ひ出ゝも千賀の塩竈こがれ
ぬ日とても忘れきうこわざとあまし
くやしさよ称うとふやすかたのとり
とりよ思かゝりたる殺生の中にも
悲やなお鳥のおろかなるかなつくはねの
木ゞの梢にも羽を敷き浪乃浮巣を
もかけよかし平沙に子をうみて落

鳥乃だりあや親ハうすまれどうとふ
と呼ハれて子ハやすかたと答へけり
うたれやをとりうやすかた親ハ
空にて血乃涙をふらせバぬれじと
すがみのや笠をかたふけ爰かしこの便り
を求めて隠れがさかくれみのにもあら
ねハ猶ふりかゝる血乃涙にめもくれ

あ井よそかはつきまでみちのくれ
かはくきうやすかたと見えしもうとうや
すかたとみえしも冥途にしては
化鳥となり罪人を追つ立てくろがねの
はしをならし羽をたゝきあかゞねのつめ
をとぎたてゝはまなこをつかんでしゝ
むらをさけばんとすれども猛火の煙に

むせんでこゑをあげえぬはをしをころしゝ鳥を
ころしゝとがやらんにげんとすれどた
ちえぬは羽ぬけどりのむくひか
うとうはかへつて鷹となり我は雉とぞ
なりたりけるのがれかたのゝ狩場のふ
ぶきにそらもおそろし地をはしる犬
鷹にせめられてあら心うとうやすかた

かゞ安き隙なき身の苦しみをたす
けてたべや御僧たすけてたべや御
僧と云かと思へハうせにけり

右之本者観世太夫織部
章句眞本令改行畢
正徳六丙申歳弥生
天保十一庚子歳孟春改正再板
皇都二条通御幸町西江入町
山本長兵衛